



環海集
拾

ル 2
1368
11



1968
11

環海異聞卷之十

此書乃... 卷之十... 命...

環海異聞卷之十



國王は目見以来之次第

ガラフの宅に十四五日逗留せしは是へ五月
十五日より至り以十六日國王は目見は是後
當そお後迄日本仕立新彼は用何とも
この出立は後よりは日ガラフは先達て出仕
せり命をて各節頂と判り月代頭とをり

装束調の民も辰翁ハ之申善六翁改序已之所
之形略の四人越合控人お持以定之るの車ふ
のせりてお出るガラフ乃巻より三丁程あり
是ゆ王宮町の内ふありて城造りといふ之を面
構一の如くなり一方川流きといふ三面の也
館内地形高きす廣き也丁四方も何なる門
内ふの番人今之は支例子部人々鉄炮と持て
表通四面高き長屋の如く石造りて内宮の也

後より宮殿一体五階作りの中一階毎に硝子障
子あり外より中み入る事なき意あり五階の子遊
廊あり大門口の幅乗車に輜蓋といふ自然に通
廊あり程之葉内乃段人自ら何れも殿中入りし
ふ爪先より自然と高く外へ出ず是ゆ外へ出
階といふ事なきは階目といふ外に外通
りあり内宮に板石橋を架す橋幅七
八尺程あり其橋の上は厚く土を敷き

申付とも相居たり万もあく生備所し出され
年乃告知と以て序列を定めらる例に役人四
五人指原居る大役人の内何れも下せし
目見一の時此後なるもあまし各は玉の御
事又御玉いし一、而た存念次第以上と申
四文う仕らん御せり彼是十月、生降(カラフ
先立して帝王を始り母后皇太后并君一同
出られり母后と帝王自ら手とひき出

たをなれぬぬすたをとりぬるゆここと
彼玉の風何れたをとりぬるゆここと

王乃相親恭

爰或殿有り白肺を懼あき娘は是(あり出
飛して首と下事平伏せんとしと多禮信子附原
一役人け玉いきて見ゆらう禮敬なり平在
すきりあられしひらる所何れも起ちて少し
とさげ指され、母后歩と進め来り並指事者
たをえあらし自ら指示されし、何れも當今
たかす、王の并君あらし、清后とひきりし

告げ去らせしより帝王も又近きありのひてあふ
問はるゝナニニ侍等も去り歸り交るゝの終り何れも
畏れまほしカラフ侍よりヤせしゝ者今猶も
侍等歸りし止るも無理の侍侍らぬ人ムカ信せよ
四情千上魚しと也は侍より兼治序こゝの
五人き侍の人の終り意ありしは帝王自ら
問ひし言はぬ何ん憂ひしよりしや私に四者
あふ留りし夜とさ上す津を又儀系た卒太良

四人の何れも中玉の返り侍交り十年は
他より五五偏し侍交り侍より上り侍新編
帝王シテシカ領事以成程侍交り思ふ其の志の
なりと四人の者の肩は自ら手と取れあふ
のふりなり 彼あふ留る六人の者もいふとある 叔弟君
おどりの終るすいりあるんや
侍等の老く向ひ日あて侍侍交り侍といふ
問ふ人しと侍と帝王問ふ及もぬりし
割せし目はうひの気色侍し侍問す

かゝり止めぬれり后は良衣あふ装束ありて
側女中しえは良衣五人附添中衣ありて
近侍給をすあつは後偏りて立ちたりて
き女姓のゆきをぬき取てあつて思ふあり

一帝王の服飾結構ある甚天^{アイヒロド}我^ド織^ドの羅紗
とる申衣有下銀糸の星^{スライツク}のはきもの物
はあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
君の服飾の星の金糸を
大畧雜事部
等ふ出せ

冠といふ振の拍きなし王のみオキサンダラ
バウウチと稱するはは年廿七歳といふ
母后皇后甚ふ両垂珠^{ミタマ}と孔と穿ち何うえ
事あるもの証垂^{ミタマ}下く禮も金玉と考す
あつてはあつてはあつてはあつてはあつて
の等形乃あつてはあつてはあつてはあつて
結以針ありてあつてはあつてはあつてはあつて
男女何事も髪つは白髪粉と考つて銀^{シラ}

髪のやうふ又申すなり

母后乃名マリア ヒョータロオナ

后の名は不変 子イメツとりし國より嫁し

来れしよし

弟君の名 コシノキノ パウロイチ 年廿三

とる事

一時時王の附添の近侍の一人 ガラフ乃外

一人も之す椅子に坐す中し飾物もなし

平常に二階の住居のよし

一殿中芝居中もある所子ふん文あり

梅の芝居中といふ我方その能事

古い小頼ありし

ガラフ何れも一侍し今日珍愛見物あり

不あれをいれり也此の事よし一見あり

おと王命なりし事何れも難ありし

お福徳事その尾能得て帝王始末あり

何れも殿中と通玉せり

那夜物といふ船の上オホタマ大球ありは球の
付家風と籠々虚空コウクウ不形行せしむるヤリ
といふ物のよしは日玉王乃速見ある事
仕無かるゆゑと申

按ふは那物つ見の僅ある目と揮ひ
日本人目見ふ以後し流るる事
是とも見物中其評候てはしと申

王宮一部と構へる物と云ゆれは城構ひ
といふは中一禮ふ玉階作りは造り
建てたる宮殿と申申内へ入りては段階を
あやむると云ひはしといふ間毎の窓を
五階ありといふ説を信し思ふ事あり
造りかたはるものなる毎に是をより再
造りて間毎窓も詳ふ語多しと云す唯
造建度大精巧と表せらるると思ひや

そのことあり 然るに 然るに 然るに

王宮へ漂流人招得の式極めて神皇無
造作の事や〜東方の俗ナラハシの古い差
ゝあるものと思ふ事 己の光を又々女帝へ得せし
時の事河原の事ふ是〜お似て程馴れ親
〜し振ふ笑申周々振ふ出れい皇女
是物おいふん事 國典例格をとあれあ
仕形ありありや〜皇國の世官職の品階
次第ありと〜下等外宮の事あり

月方へ近するも〜官人〜之事
〜見〜法式ある事あり〜院に彼
地ふ海あり〜いひ〜老あり〜何れけ
海船形ひ〜者あり〜親〜相い
格外のものあり〜日本人形〜海あり
大や〜玉の縹色あり 海あり〜皇邦の人
なり〜事あり〜身至る事 信あり

とも彼ふし何そ是を賤しめんや
んや思ふ必す生人なりて
禮の式いそれし法令あまきり
志きれ一己の臆記の

一國王夫婦の肖像布地に
しる物二筆と太十序都府
撰し来り神彩実ふけり
英と表せり状今く写真と
見ゆき

一度

御覽とも強てお下りらる
模寫せしめて
圖をたふ出

は肖像之宝物ふして市中
いれも

按お彼地方國王の真容を
世ふ見えたる層ふかく
巴法沙の金銀錢貨を
あく當りの面鏡を
エカテリ十の像のつき
し是を何かくて



魯西亞當國帝夫婦肖像

退ゆりある、後人業内にて車馬のついでに
見物するの場あり、行くに、都下を流るる「ネ
ハ」といふ大河のむらぶあろ、ワシライツケ（イオストロワ）
とありといふ所なり、^ネ辰花河と舟橋あり、是より通
用すは船を、大造のめを、四万石の船を
と二十六艘、鉄をりめて、撃つ、つけ、向ふの岸に
渡せり、是並へる船の上へ、厚板を敷き、
たろふ欄干とつ、車馬三ツ並へ、通らるる、船の

幅をり、欄干の糸、右端の、人も人の通、舟馬
程の、万とあり、又、板の末端も欄干と付、二
重らんとし、舟馬車馬、徒歩（カチナチ）、舟馬多、船
仕、船も、船橋あり、土れと渡りて、
島の内へ、到りし、ふ、船程、岸を、場あり、四万石
岸へ、大砦（ナリイ）石あり、築き、舟、たろ、石橋あり、鉄
の、大橋とあり、舟、附てあり、舟、環ふ、大船を繫
き、舟、舟、其、見物、場あり、圍あり、入る、門、番人

居方内へ入れ見物人夥々群集す
 輕く入りて國王の入束あり、此所ありて車より下
 ガラフ先キ立ちて國王の母后の心を撃きて糸
 られり

居場の生の中より小船の上より仕無き大球とす
 並繩をつきて其方より是を持ち起し居方体あり
 大球は好りしりて入りて、此國方の如し

居場の生の中より小船の上より仕無き大球とす

シヤリ圖



船の大サ一石程もあまきり湯く二人乗多き程に
一石の中ふ大球タマやしも付袋を大サ三四百程もまじ
須地く籠カゴにしまる物の振ふる舟船の内人入れ
に付袋天窓の當り程に相付袋一風一をいふ充滿
せしめしと見え梅りく新き持ち多し之綱を
たまきいあふけらんする勢ひに國王入來の浮を
あくは船中男女五人多し梅り小旗とふも持り四
面ふ盾りし石物の大勢へ白ひ旗とありし何物も

きり是は船の放し多し付無相あれを首尾能きありあ
皆船の口鼻も入し目ととめて口後あれ只今おし
也といふ船の口上の旗ふはし生れ綱を持多し人し是を
川ぬきそを風しふれ船付袋お從ひ志ありと上と見え
しり波穿ふ高く虚空へ飛上りあり群集の大勢
天を仰きそをさうふ是をよむし暫時の内こころふ
んぬる程ふけしつめあより南へ指て横ふ走る振ふ
んぬしり忽ち生れきんぬぬ振ふありあり國元の地

風船飛走圖



一付船の仕無程居たりて見し事なれ、詳ふい
やめず大袋の糸紙つ事船解き、並けりとの
根ふる事難記をきくふ大袋の下の処別ふ
袋ふ志る細の等おつ事あり大能つらん
す時、は袋細より大袋の尻葉を細の葉と
似しと、尻葉は仕無なりと、お船中幸目鏡
と、鏡の葉は、さしと、す方場おと、定め
下り事、の事

一付器他玉の人乃、工更あり、出来事物、おは玉
あり、初あり、見、おる、船子なり、この園より、お
り、おる、事、あり、し、や、園、より、此、場、より、隠、事
あり、て、一、見、せ、し、し、それ、あり、し、思、は、る、此、時、南
の方、某、し、い、お、お、さ、花、形、し、尻、葉、を、く、つ、も、
乃、中、の、お、一、二、里、も、手、更、の、地、の、尻、葉、あり、し、
依、て、不、ろ、尾、を、あり、し、再、以、仕、事、し、の、り、や、
仕、無、事、し、升、せ、け、お、お、し、事、中、を、約、米、の、お、

少くも遠くを以て居る事いふはよし 二度目の
時は是よりすは思ひのまゝに 行かまはし
よりムスクワの都をこも やるゝとをり 七
里の
百也

は物何のゆゑ何の用とあす 物々笑ふ及をす
人々あまをこやリ」とせしをりこやリ」ハ
丸き球のゆゑなり

按ふ何とヤリといひしをきし

女を人々必ず同和するゆゑと笑ゆ内の内の仕立
はあまはさるの任女あまをききたるぬ事
なり

昨日述べしも強れをあし人をあつめし 孫子
なりはあまを是物よりききし者代錢も出
せしとて笑申はるる所しふても人をつま
空をゆくを居しはるる孫子の孫子と見し人
魂と消しはるる事

使事船長梅崎一上陸し旅館
洋館中の懸子紙を一つ圓き玉と
とり下底ふはとありお大鉢お小紫
のたと禁^キはとてやううある大氣
なりの上子太の紙袋と^{ラホ}は煙を
と袋の内へ籠めたり袋の内へといふ
煙おとちある時天上お升せられ紙^{タッ}香
の如く揚りあふ空におあがりあり
を系
不用

土地の人々怪しむる内お氷^{カッ}河^カ
いふおろ人家乃底上お屋^{ヤネノウ}を^カれ^カる
とけあちあるは煙の舞^{マヒ}出せしと大
笑の空をこけ^{ヒケヒ}能火の人々夥く寄
集て大騒きなりしうちおあ^カて
は球の底を破れて籠^カり^カる煙のまれ
るおあ^カち^カり^カてはる^カる^カあ^カ
は^カ中^カ怪^カき^カも^カ業^カい^カし^カて^カは^カ疑^カか^カり

氣は西乳間ありしうこ生深算分りてお宿
しと色はれ球ふ氣を合ませこ生氣の
カありてお宿空之升せざる仕方と云申彼
こヤリのお升するの理ふれと同しとて
略式あるは但大小強弱の区別ある
まうてをさるる魚しとてなり は食と製し糸と糸
て引きあす一二度も
のち世試しし上りて
あけしとてなり

揚子江諸の國天明の初年江戸東向の

和名加比丹某を校揚かゝるを揚系
しとれ去年お承り候なり我國人も
あしと物見さる中をれとも新言の奇
器也と板行しとて交留巴 ジャカタラ
天竺地方の海傍
ありて中バタヒア
といふお和名
領ありなり ありて揚越せし形なりとて
揚乃一其あり某候お承りしとて名「ソクト
ジキツプ」といふしとてハ氣船といふとて
一其圖例の略図あり 其器是を揚て

和解をなすふは蓋々近時拂郎察國の
都府把里斯バレイスと云ふ所を新製すまふ
なり和名東をてまじを「ソクト」シキツプ
免船の又「ソクト、スループ」ソクトとは免「スループ」
考免船のりなり
又「ソクト、バル」バルハ球なり此自出れを併考すふ
魯西をて「ヤリ球」と呼ぶるもこの
義を何「ヤリ」と 等の三ふあり 拂郎察國
「ヒル」把里斯の
内なりと云地の「カルニス」
ロベルと云ふ人創りて製作す船の長さ

丈餘幅四尺餘深サも同し人斗人と載
すししき森崎氏は得記小圖を傳
紅毛雜話中へ載せり公孫せり但此
圖記のり和名一人と云ふも亦時新奇
なる傳記と記せしめてあり其物とも
んずし其後とも傳すと云ふり吾も是
と思ふ彼空躬理の圍俗天地間充滿
充塞せらる空氣の理と云躬む多の日一

日より精且意なりと定申し生理を究め
ふりしより虚空の気力亦丹を〜
風子御せ〜む〜とのつまあつや保
〜を〜は見せられ〜何のや〜併せし
〜院子〜し〜亦後亦和宗将来は図
と遍願ガク子作りミナソナリのあり享和の年
一得官某カラニダツトシ出れを一諸侯ふ呈す余ふ
是を亦〜し〜を〜ん〜ふ〜圖と大以〜

なり〜は圖下子少記あり得され〜ヤルジニラス
チイレリース 拂掃察の都府 としふあろカル
把里斯中乃地名
レスエトロベルトとしふ人氣球としふものを
製し升せ試むるの圖としありなり拂
掃察あり〜ゴロベアエロスタチ空〜としふ
はしられ氣あり〜球としふある上る申
〜トふ 曆數 一千七百八十三年 彼十
月初旬としふ教言なり是は我天明

三年癸卯の嘗て當^{コトシ}文化三年丙寅より
二十四年ありしにあり新嘗て二圖形
状稍異なりしにせむ古曆数の比試に
製するも乃と見へり但末に其意を
知多しに時々は交濶なる等ペトル
ブルカ^{シタクミル}あり目睹ししにふにヤリキ
今くはあは是申依て意圖と新圖乃
觀と出し彼者たふおせしふ意圖の

新す新圖の觀とあせむ物とアテ荒^{ニツリト}
彌^{ニツリト}ししにふ平くや親ししにふおの物
まはししにふ圖の如しにあり依て觀^{カモ}ふ
ふ意圖の初め試ふに著する物乃圖新
圖に己に試ふにしにふにあり時々の
三年乃比ふありしにあり彼等ら
傳ふに近來の新製且他方より
傳ふに東より西國青にあり

云々の記と一々符合せず我輩初きて
其圖をアッてそをぬきとてつらきと
年とうとうきりぬ我 東方の民救萬里
外の遼遠絶域に源到し親く生を
見て又をたふす 本邦へ帰れせしむ
ア奇やして亦其言徳をばしむ不可
思儀のなきをより生ふア奇異といふし
但し造作と要用と如何といふ事を

急ぎつゝきつゝのゝぬれも流海澄思へて
細うふしを理を嗜み彼を濟すを誠まき
紙球の活と傳せ考へあゝ思ひすふ
過く極きいりや

つら目右にライツケの標の内ムスカームリト
りふありはふく見物ふつらたれあり是は
のきく物珍なりとすきふを懸くはくおも
内へ介してふもふ開帳の雲空庭場のたぐ

くまりくいと見りてふも娘は仕無け一列毎に手
すりつと一と見ぬめす又見ぬも何物もさす
と并一とにさあふは流れ分れもつれも文字を
知もされは流るつ一す娘も好し教する種
ふとの字も目をあさうせとさなり禽獸虫魚
の類は薬水に浸し薬海に流してあり又薬金
入るふ志るる物も多しは中目もさす是は物

象の骸骨一具 枯骨^{ツカヒメ}なる支策^{ツカヒメ}くを

はあきい合せて今く値もさりの也

拘の丸むき腹内につら物も今形をさす
を眼も玉眼を合しは杖生ける物の也し
これ國王の赤玉拘の骸^{カチ}なるものとかく
製しては形を造りたりと也

薬水に納めたる胎^{ハラクモリ}胎の全身も長蛇の
ふすきのめく巻ついでる物あり是はい如
物ときもさるふ大程産ませ遂に死なず

多き婦人あり、其後を解剖トキサキし、其女の
胎あり、怪おありと申し、後吸金の為イナノコに
花の形ハナノカタに似たりといふ

大きき竹、其れは地方小産せざる物
珍物と申し、花の並ハナノナミしと云

鴉カラスの似たる大鴉とあり、金拵カネヅナし、羽とあり、
すねの志シなる物あり、其羽翫ハネウタガする物
の志シなり

大れと云ふ、桐の下キノシタに金作りカネヅクリの鶏ニトリあり、其の
の仕シ画エや、めをツツリ報ウラり、又其脇ワキに、時トキあり
され、目と云ふ、且す、振ウラふ志シなる物あり
又其下シタに、鱗ハツタの作り物あり、跳ハネ行くウる生の
物と云ふ

男女の陰陽共トふ七ナナ寸位サテの物、各オノオノ婦メす
其れ、今イマに、茶チヤのシ浸シし、並ナミあり、是コノに、慶ウレシ生ナり
其れ、分ワケ外ノの大物オホモノを、もし、老オシあり、其れ、死シ

浮たれを有りてめは終くよるはよし

世界に諸玉の衣被と集め並ぶるあり一向
是馴ぬ物たり其月唐人装束傘履か
へしありは中お日本人の被もあり是是あり
やといふ何れか何をもなり是分けさし彼人指
示してされありといふ或るれは衣紳や多民農
父杯の玉用する上針と刺し綴りある古玉之
江戸にて
判子云 志られもよふ日本被布是しありしふ

何れは方の被あり玉ふ於て極めて我玉の物
ありしと云ふ

たまに布帷子本絁の物又本絁布子の
引ききり類を〜の被付なりしものやと
換して其修用ひきり物を二枚何をせ
麻糸より帳本絁を〜の如く刺しありと
上針といふ被付をかきれりありし物と
自ら整衣とかく刺し綴りて農業漁

ヤフレキモノ

編等の時忌用すはお今くちんはと
諸邦の装束と並しはし給ふことし
まゝの也思ふは是むく南新洋軒清を
の者なり漂流せし者其の忌用せざる
方り者ことし珍愛思ひ取くはふ細
重し子と申す也

世界の人物七十七点あり皆は都ふ事なり
有ふは解り七十七通りなり衣被の事なり

是れありし

梅は海世界の事あり何れ七十七点限
しきやあきし事ありし

又梅はムスカリーモリといふ名何れあり
光をまゝモスカラートといふ名珍物と
し所ありしなりは物酒の大略を以て考ふ
是れ在来諸邦世界の中り珍物異事なる
位せり儲蔵するの所庫り申す考證と

し 珍とて奇とする物を種葉品にせし
き物たるを種と稱すの源氏皆耳目に
せざる物のこそ何ふ一見なるを
根もあらず形もなし唯せざる物を
乙乞一葉の遺根いふをみか
はをふふ大いなる球と稱するを
家石造りあり十間程もあり二階
の程と聞き内へ入るあり

その内へ入れ四五百程あり大球あり
其球より子のごとく内へ空虚に
内へ入ると大程のほあり中へ入れ
間をり根うけあり各は根をうけ
大佛の胎内へ入るあり根をうけ
其のわたり一方の螺轉と
内輪旋轉し入口に塞がり上の
あまの星の早しめあり腕をうけ

人々之を動ず又螺輪ネジと云せざるふ
と一方遠あ多也入口の戸初めのたゞく
開きぬりしに旋轉しむる珠子形と何
いふ事乎のものを又如何の仕立お成也
舟もさるるなり又より二階へ登るもさる
舟の板縁をて生中を圓くさるりあやも
ふやくしをさるり球の上へおさるりあはれ
るもさるるなり是を今も球ツクの表也

海世界の圖有りあり且て世に諸玉の圖
ありをさるる我オロシニア國土かゝる
ところを日本をかりかゝ指示しむり

はるも名ニヤリといふよし
図球をかニヤリと
りかたり

按ふと地球を廣大しお知悉しむる
物と乙申内天象を示せる物ありし
鵬魚のふ地年乃かや保板の象スカタ
のこしせもる。珠子あり天象もオロシ

ア北邊地方より仰む所の星象のみ
ありきうに造作の意例^ガを知りし
表に今く地球と云ゆ球と仰む所の
板縁にあり地年の意ありしと云ふ
洋ふせきつを憾とす是も雅無人の
已らふとほざるおそかり

ペトルブルカ都府圖十四幅あり

象廐 今くホルステインの地より輸せり

天地球をあ置すと云ゆ或はけ受あり

右に地球の圖想像して作る所の略圖内天

象を示せるものにして^{オモヒヤリ}曉^ガを^テし^テし^も

に思ふ所より思ひやりて圖を製する事

たのみし



環海異聞卷之十



蘇州吳縣卷五十一

